

全員が甲板上に集合、将校、兵の区分も忘れ万歳、万歳の歓喜が船全体を包んだ。

昭和十九年五月、日本をあとにした時点で、再び祖国に足を踏み入れることは全く不可能と諦めていた小生にとって、その時の感激は六十有余年の我が生涯において最高かつ永久に忘れ難いことで、人間の生命は何物にも替え難く尊いものであると、つくづく知らされた次第である。「君の人生でもっとも嬉しかったことは」と質問があれば、即座に答えるであろう。「生きて再び祖国の土を踏んだこと」と。

我々を満載したLSTは、やがて朝の連続テレビドラマ「和っ子の金メダル」で一躍有名になった日本海側の山口県仙崎港（当時は小さい漁港）に入港した。

お互いに再会を約束して、それぞれの郷里へ足取りも軽く降り立った。時に昭和二十一年五月早々、快晴の日であった。

今次大戦において不幸にも戦病死された将兵の皆様のご冥福を衷心よりお祈り申し上げ、我が軍隊生活の手記を終ります。

## 終戦後の満州の労苦

熊本県 村上逸夫

私は昭和十九年一月に佐世保海兵団主計科に入団しました。海軍部隊の主計科は庶務、経理を掌る主計科事務室と、衣糧を掌る被服倉庫と烹炊所に分かれています。新兵はすべて烹炊作業です。

入団して間もなく新兵教育のため、鹿児島県の出水海軍航空隊主計科に転属しました。

何百人もいる中に外地、内地の部隊と適当に振り分けられ、幸いにも郷里に近い部隊で、ほっと胸を撫でおろしたのが実感でした。

新兵教育の班長は、巻木上主曹、助手は厳しい野見山兵長でした。烹炊所の主計兵は烹炊が主体、つまり飯炊きのことですが、付随して食糧運搬も入るわけです。

したがって、新兵教育の中に重量運搬に耐える体力作りが組み込まれ、日課として米俵かつぎの訓練がなされ

ました。班長の笛の号令で六〇\*の米俵を上げたり下ろしたり約一時間の特訓には全く閉口しました。もともと町中育ちで力仕事はしたことがなく、また上げる要領も悪くこれには大変苦労しました。若いときからギックリ腰になったのも、この時の後遺症でしょう。

烹炊については、魚肉のさばき方、野菜の切り方等基本的なことをたたき込まれました。また夕暮れ近くになると次第に憂うつになってきます。それは毎日の吊床（ハシモック）訓練です。吊床は寝気持は満点ですが、その吊り下ろしには艦隊勤務を基本に、敏捷な動作が要求されています。たしか、吊りに四〇秒、下ろしに一分程度だったかと思いますが、毎日一時間ぐらいの訓練には泣かされました。吊り下ろしの早い者から整列で、遅い者は毎日、例の海軍精神注入棒でなぐられ方です。

また冬の寒稽古での海軍相撲、負け残りで負けれると土俵の上で踏んだり蹴ったりです。厳寒の中、早朝の上半身裸体での海軍体操、一枚の下衣を脱ぐときの厳しさは終生忘れえません。

休日前の甲板掃除、居住区の甲板を兵長さんの「回れ」

の号令のもと、腰を落して這い回った苦しみも大変なものでした。

新兵教育を終え、昭和十九年三月に実習部隊として部隊新設準備中の鹿児島県の国分海軍航空隊に一〇人の先遣隊の一員として転動しました。ほとんど諸設備も完成していましたが、兵舎内は鋸屑が散乱している状況で、約一か月ぐらい駅前舞鶴旅館から航空隊に向いて開隊準備をしました。

久方ぶりに旅館の女中さんに囲まれ、作業に出ればトラックに向かって「海軍さん、海軍さん」と手を挙げての大歓迎で、一人前の兵隊になった気分であろうところに来たなと思ったのですが、最下級の兵隊は私たち同年兵三人で作業はひどいものでした。

とにかく新設部隊ですから、食糧は米一俵ないですね。私たちが主計兵は来る日も来る日も、毎日が食糧搭載です。駅からトラック一台に二〇〇俵積まれて食糧倉庫に運ばれるのですが、整地不十分のため倉庫まで三〇斤かついで運ぶのです。古参兵がそれをきれいに積み、兵長さんは倉庫入口で数量チェックするわけです。一台分おろす

と、もう次の一台が来ています。新兵三人が担ぎ役で、  
休む間もなく担いで歯を食いしばって黙々と運んだ辛さは終生忘れえませんが。

そのほか、みその四斗樽、砂糖、大豆の八〇<sup>キ</sup>等、何日もかかっていたの食糧搭載、入団当時の体力も、これによって充実してきました。

昭和十九年五月ころには、各兵科の兵隊もどんどん増え、正式の部隊機能も備わってきました。そのころには、やっと一等水兵に進級し、一人前となったようですが、部下に召集兵がつき、馴れぬ飯炊きも、やっと格好がついてきた感じでした。

そのころ南方基地も制空権があやしくなったのか、ラバウル航空隊の一部が転進して、国分航空隊も練習航空隊から実戦部隊化してきました。

ちょうど八月に、戦線拡大、部隊の新設等により下士官の不足補充のため、主計科下士官候補生が募集されました。資格は旧制中学卒業以上ということで、早速受験しましたが幸いにも部隊から三人合格し、広島県大竹海兵団の中に特設された主計科(経理)下士官候補隊に入

隊し主計兵長に進級しました。

教育隊は一階が寝室、二階が教室で、最初の一个月は午前カッター訓練、午後陸戦、朝夕は駆け足と海軍体操とめまぐるしい訓練でした。その後卒業までの四か月はトッカ教育で海軍刑法、諸例則、経理、庶務といろいろの規則について学び、二十年三月卒業と同時に二等主計兵曹に任ぜられました。

早速補充基地である佐世保海兵団主計科で待機したのですが、空襲に備えての食糧分散で大変でした。

二十年五月、旅順の特別根拠地隊勤務を命ぜられ、初めての外にでることになりました。

五月二十三日佐世保軍港を出港し、一夜唐津湾に停泊し、夜陰に乗じ朝鮮の鎮海の要港に上陸しました。早速朝鮮鉄道で旅順に向かって北上しましたが、逆に南下する貨車をみると、陸軍部隊の兵器、兵員を満載してどんどんと南下していました。今から考えますと、内地決戦に向けての関東軍の大移動だったのだと思います。

旅順の司令部は昔ソ連軍が使用していたという、こじんまりとした建物で、街は静かないところで、戦火を

避けてほっとした気持ちでした。酒保には酒、煙草と潤沢にあり、まさに別天地の感でした。

そのころ、ソ連軍の侵攻に備えて防空壕横穴掘りが始まりました。

制海権もおかしくなつて、大陸から内地に向けての貨物船も、出港間もなく魚雷により撃沈される状態で、港には磁器機雷を投下する等、全く戦況不利になつてきたわけです。

この状況のもとで、機雷処理の掃海隊として七月に大連港灣警備隊が発足し、私はこの部隊に配属されました。司令は永井大佐、副長は特進の大久保少佐という方でした。主計長は山下元利大尉で、私は経理担当で一〇人ぐらいの編成でした。

兵舎はとりあえず東洋一といわれた大埠頭が流用され、兵舎、倉庫に使われました。

戦時中の労苦は、訓練、教育等で実戦の苦労はありませんでしたが、八月十五日の終戦を境に苦労が始まりました。

まず敗戦処理として、ソ連軍に対する引継簿を作れと

の上司の命により、兵器、什器、被服等一切の引継ぎ簿作成に数日を費やしたのですが、振り返ってみるに何にもならないムダなことで、ソ連軍はあるものはすべてかっさらつて、私物の時計も略奪するという有様でした。

九月となり、完全にソ連軍の管轄下に入り、みじめな捕虜生活のスタートとなりました。とにかく丸腰にされ「大連から三〇〇の地点に移動せよ」との命令で、金州というところに辿り着きました。途中、中国人から投石されたり、罵詈雑言で敗戦の惨めさをつくづく知らされました。

金州郊外には陸軍の大病院が建設途中であり、おそらく満州の後方基地病院だったのでしよう。使役に苦力を何百人も使つたらしく、苦力小屋がそのまま、私たちの宿舎になりました。

三角兵舎を各隊の区割りをするため、一番に巡視してまづびっくりしました。兵舎を出て白脚絆をみるとゴマ粒みたいのがびっしり付いています。よくみると蚤の大量です。苦力が出た後、二十日余り、飢えていたのでしょう。とにかく蚤とシラミには復員するまで悩まされました。

た。

ソ連の捕虜として苦しかったことは、飢えと、寒さと、作業ですね。冬季は零下一五度、風が強いと零下二〇度ぐらいに下がります。大、小便もそのままだちに凍る寒さです。

作業内容はシベリヤから船で大連港に送られてくる燃料、食糧の貨車積降しが多かったようです。これを各進駐部隊に送っていたのですが、さらに工場設備の撤去作業と、ダワイ、ダワイ（急げ急げ）と火事泥にこき使われたというところでは、

作業して感じたことは、日本人は本当にバカ正直ですね。例えば石炭下ろし作業の場合、四人一組で貨車一台の荷を下ろすよう命令されると、早くすみ次第帰すというので、必死に働き、八時間ぐらいかかるところを五時間ぐらいで済ませますですね。そうすると次回からは三人で一台と知らぬ間に二人で一台とノルマが上がリ、非常に労働が苛酷になるのです。

こうなることを日本人は気付かなかったので、早く終えてゆっくりしたいというのが日本人の気質なのです。

そして自分で自分の首を締める結果となり苛酷な労働になりました。

石炭の貨車下ろしは粉炭が多くて、下ろしは手早く下ろせるのですが、下ろし終えれば線路が粉炭で埋没し、貨車が走行できるような粉炭を取り除く作業が予想外にてこずりました。全員貨車の下にもぐり、真っ黒になってスコップではねのけ、作業終了時は人相も分からないほどでした。

それから食べ物の問題です。ソ連軍からの配給は一人当り黒パン一個が一週間分です。几帳面な人はそれを七等分し毎日食べるのですが、飢えている人が多く早い人は二、三日で食べてしまうのです。後は作業に行っても何でも盗んで食べるしかありません。

作業場に行く途中で、中国人の畑にある食べられるものは手当たり次第に引き抜いて食べました。にんにく、人参、大根とそのままかじって生きていたというのが実情です。

ある時、一か月分の主食糧としてさつま芋の配給がありました。日数が経過するとともに腐りが発生し最後に

は全く食えない状態になりましたが、代替食糧を要求しても知らぬ存せぬの一点張りには参りました。

そういうことで飢えと寒さに加えて、作業の疲労で毎日へとへとでした。私は作業班長でしたので、毎日の作業割当てにはずいぶんと苦勞しました。ソ連軍からの作業命令により作業人員を振り分けるのですが、作業にも割りの良い仕事と割りの悪い仕事があるのです。余得のある作業は、例えば将校官舎の清掃、大工仕事、部隊炊事場の釜炊き等ですね。作業も軽しいし、将校の配給食糧を呉れたり、炊事場の残飯を腹いっぱい食えるものですからみんな喜んでいくのです。

材木下ろし、石炭下ろしは重労働でだれも喜ばないのです。この割当てには神経を使いました。昨日は石炭下ろし、今日は材木下ろしじゃないかと、文句をいう者も出始めたのです。

終戦前と違って部隊編成も陸海軍ごちゃごちゃになり、昔の上下関係が薄らいできて、辛うじて組織と秩序を保っているのが実情でした。従って全員に極力公平になるよう作業割り当てには特に気を使いました。

ある晩、夜中の十二時ごろ叩き起こされ、今から金州駅に爆弾の貨車が来るので、早速その下ろしにいくというので、厳寒の中をテクテク歩いて駅に行きました。二時間、三時間待っても何も来ない。みんな震えて、明け方の五時ごろ何もしないで収容所に帰ったわけですが、こういうことを何回も繰り返し、捕虜の苦しさを痛感したものです。

食糧事情も悪く、胃腸の悪い人、呼吸器が弱い人はほとんど二、三週間でバタバタ死んでいきました。

二十二年の正月は、今まで可愛がっていた軍用犬のシェパードを殺して食べてしまいました。殺し方もソ連軍に分からぬよう風呂に使っていたドラム缶に煮え湯を焚いて、尻尾を振って来た犬を頭から突込み蓋をして殺したのです。今考えると全く人間のすることではありません。

肉は煮込んで正月用の特別料理となりました。みんな旨い旨いと食べましたが、私は犬の断末魔が思われて一切食べるのがやっとでした。

そういう食べ物の苦しきというか、食べる物が不足し

ていました。私は若さと、幸いに胃腸が強かったので元気に病気にもかからなかったのでしょう。

寝具といえば毛布一枚です。冬は室内で凍りつく寒さです。私たちはどうしたかといえば、作業場から麻袋、セメント袋、新聞紙を持ち帰り、毛布の外にまいてちゅうど状袋にして、足は靴下を履いたまま頭は防寒帽を被ったまま寝て、寒さに耐え、何とか冬をしのいできました。

以上、戦中戦後の苦しみばかりお話ししましたが、苦しみの中にも楽しみもありました。